

ハワイ初期開教と九州における真宗ネットワーク

高山 秀嗣

はじめに

近代における仏教教団は、明治政府新体制との関係性を保つ意味からも、積極的に社会に対して開かれた活動を行うことに努めていった。本稿で扱っていく「海外開教（以下、開教）」も、ある意味では純粹に自らの宗派の教えを海外に伝えていこうとする行動であったと考えられる。また同時に、教団全体の後援を受けつつ、国家の海外進出とも軌を一にしたあり方であったといえるであろう(1)。

こうした開教の一事例として、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）のハワイにおける初期開教の様相を取り上げるとともに、ハワイ初期開教に取り組んでいく僧侶や人物らの背景として、「九州における真宗ネットワーク（以下、真宗ネットワーク）」の存在があったのではないかという点について、検討を行っていききたい。なお、ここで論じていく「ネットワーク」とは、明治前期に九州に存在した学寮を中心とした関係のことを指している(2)。

ハワイに真宗僧侶が最初に降り立って、すでに二二〇年の時が経過している。近代仏教研究において、ここであらためてハワイ初期開教の意

味と意義についても再考しておく必要があると考えられる。

なお、ここで扱う九州の範囲とは、まずその橋頭堡として日本仏教最初のハワイ開教者である曜日蒼龍（一八五五～一九一七・以下、蒼龍）の出身地と、その周辺である現在の大分県を中心とした地域における「真宗ネットワーク」について考えていくこととなる。

一 日本人移民と浄土真宗本願寺派の海外開教の展開

仏教教団の海外展開について考えていく場合、海外移住者（移民）の存在が重要な要素となってくる(3)。その詳細については省略するが、ハワイ初期移民の中心は広島県や山口県などであり(4)、これらの地域が後の本願寺派の開教活動と深く関わりがあることが伺える。各県では真宗の勢力が根強く、移民の国外への移動に伴い、その集団からの依頼に応じて仏教教団からの派遣僧侶が現地に赴く、あるいは移民を追って伝道活動を行うというパターンがあった(5)。この時期のハワイへの移民状況を「年譜」形式で示してみると、次のようになる(6)。

一八六八(明治二)年六月 日本人農業労働者約一五〇名、

ハワイ・ホノルルに入港

↓後に元年者と称される(日本人ハワイ移民の嚆矢)

↓一八八五年まで

一八七一年七月 ハワイ王国との間に「日布修好通商条約」調印

(正式国交樹立)

一八八一年三月 ハワイ国王カラカウア来日、

日本人移民をハワイへ誘致

一八八五年一月 第一回ハワイ官約移民九四五名が横浜を出發

(本格的集団移民の開始)

一八八六年一月 日本とハワイ王国政府、移民渡航条約調印

(五月公布)

一八九四年六月 最後の官約移民船、ハワイ・ホノルル到着

(官約移民の終了)

↓これ以降、私約「自由」移民時代

(一八九八年八月、米国によりハワイ合併)

日本人のハワイへの移住を承けるかたちで、本願寺派のハワイ開教も展開されていく。ただし本願寺派は、ハワイ上陸以前からさまざまなかたちで海外への視点を有していた(7)。

真宗大谷派に比して、開教の面においてやや出遅れた感のあった本願寺派は、大谷光尊(明如・一八五〇〜一九〇三)から大谷光瑞(鏡如・一八七六〜一九四八)の連続する二代の門主によって積極的な海外への開教を展開させていく(参考 高山「二〇〇九」)。本願寺派の開教の嚆矢は、ウラジオストクにおいてであった。

一八七一(明治四)年、ウラジオストクと長崎・上海間に海底ケーブルが敷設され、一八七六(明治九)年に、日本の貿易事務所が設置されるに至り、長崎・熊本・佐賀など九州からの移民がウラジオストクに渡った。一八八六(明治一九)年、佐賀県神崎出身の多門速明が布教に赴き、後に本願寺派としての最初の海外開教の拠点ができることとなる。一八九四(明治二七)年、布教所を開設したが、これが「浦潮本願寺」と通称される寺院へと継承されていくことになる。日本の他の宗派もそうであったように、日本の同朋が渡った彼の地への布教という面が濃厚であり、日本の対アジア外交の中で、日本人居留地における仏教伝道という点で、それは「追教」と呼ぶべきであるかもしれない(『開教史』三五〜三六頁)

仏教教団の海外への視点は日本の海外進出に伴って開かれていったものであり、当初はアジア開教が中心であったが、後になるとハワイ・アメリカ・カナダなどにも開教教線が届いていく。詳しくは後述するが、門主の明如も後援した蒼龍のハワイ開教は本願寺派としてもかなり初期に位置する開教活動であったのである。さらに蒼龍のハワイ開教は、日本仏教における英語圏開教の嚆矢となる活動でもあった。

ハワイ初期の開教状況については、ハワイ教団が刊行した『本派本願寺布哇開教史』が参考になる。

我本願寺は実に我在留同胞のこの心理的低気圧の爲めに悩まされて、救を基督教に求めて得ず、低徊願望して沈吟せるの時、如来大悲の法音宣伝に着手せるなり…耕地労働者は実に弥陀救済の主賓たり正客たるものなり…然かも本願寺開教の第一歩に於て、其成功を資けし他の因あり。そは当地に渡航せる同胞の多くは、広島県、山口県、

熊本県、福岡県等、故国に於て真宗法義繁盛せる地方の出身者なることは是なり。開教二〇年にして今日の盛を致せるものは、故国に於て既に培われたる種子の実れるなり (『本派』二六〜二八頁)

島田法子氏は、「仏教僧が最初に移民救済を掲げてハワイに渡つていったのは、一八八九年のことで、浄土真宗の一僧侶曜日蒼龍であった。しかし彼の個人的布教活動は短期に終わった。その後、一八九七年に、浄土真宗西本願寺は教団として最初の海外布教に乗り出した。ハワイの日本人の九五%は仏教徒であり、その大多数が広島県、山口県、熊本県、福岡県等の真宗仏教圏であったので、布哇本派本願寺教団が最大の勢力を誇った」と述べている(8)。

二 曜日蒼龍という人

曜日蒼龍は一八五五(安政二)年、大分県国東半島にある光徳寺の長男として誕生し、一九一七(大正六)年に死去した人物である(9)。その蒼龍が、なぜハワイに渡航することになったのであろうか。まずは、蒼龍自身によるハワイ渡航時点の回顧(『布哇紀行』)について見ておきたい。

予(蒼龍引用者註)の布哇国へ渡航することを促せしは、昨(明治引用者註)二二年八、九月の頃、在東京中粗該国の事情を伝聞し、従て各新聞雑誌に我同胞兄弟殊に山口・広島・福岡・熊本諸県の御同朋の人々が遠く絶海孤島に在て異教の中に呻吟するを掲載せられたるを見て、予か我日本国に於ける我宗教界に於ける有形に属する経営も無形に対する運動も之を中止し、年を三週に期し功を永遠に望み奮然厥起我教法界裏幾十万の僧侶か多年懐て及はざる大

洋孤島の我氓民否我最愛なる御同行の久く見仏開法の益に預らざる不自由を四面異教の圍中より救出せんことを思念し、妻兒に離れ弟妹に別れ衆徒伴僧に法務を委ち檀徒親戚に俗事を任し報恩講を予修し留別の法筵とせし。(明治二二年一月引用者註) 一日大法主殿(光尊引用者註)特旨拝謁敷刻に及ぶ。二月一日日嶋地師始め旧友数十名の勝友会員は別院内に於て送別宴を開かれ席上演説あり。予答辭を述べ且つ布哇行目的を演す。一五日午前九時大法主殿の召に応じ拝謁。二月一八日正午一二時近江丸発。三月二日布哇国オハフ島ホノル、府港に着す (曜日「一八九〇」一〜二頁)

また『日本仏教渡米史』は、初期開教の状況を次のように述べている。

ハワイにおいて、仏教の布教がはじめられたころの日本人の人口は一八八八年(明治二年)三四五〇人、一八九八年(明治三年)三万四五六二人、そして翌年は五万七八八八人というように漸次増加していた。かれ(蒼龍引用者註)が組織的に布教をはじめたのは明治二二年であった。当時ハワイはキリスト教のみであり、しかるに日本人の多くは仏教徒であったので、曜日(伝道開始は干天に雲霓を望むがごとく、いたるところで歓迎されたという。ハワイ島ヒロ市にあつた移民監督木村斉治が熱心な仏教信者で、早くから日本人移民のあいだに仏教を布教する必要を感じていた。たまたま曜日(渡米したので、兩人は互いに協力し、日本人から寄付を集め、一つの教会堂をヒロに建設したが、これが日本仏教がハワイ全島において産声をあげた最初であり、それまで暗黒であつた同胞移民の間に一道の光明を与え、人々も、海外万里の異境にあつて、心の糧を求めることができるようになったのである。これが今日のヒロ別

院の前身である。曜日が日本に帰った留守中は、西沢某（名不詳）が代理していたが、明治二二年に蒲行也が単独でハワイに来たのが当時、日本人はホノルルよりヒロの方に多くいたので、蒲はヒロに駐在することになった（常光「一九六四」二三一〜二三三頁）

蒼龍がハワイに出発していった背景には、「海外宣教会」の存在が考えられる。この会は赤松連城を会長とし、島地黙雷ら当時の教団の中枢である人物が関わっていたものである。蒼龍も会員の一人であり、先述した蒼龍の送別会も宣教会主催であったと考えられる。

（明治）引用者註 二二年一月『反省会雑誌』第二号を刊行するや、それに「欧米仏教通信会報」を載せ、数百部を各地の有志に送ったが反響頗る多かつた：通信会を拡張して海外宣教会を起し、通信に代ふるに英文雑誌『亜細亞之宝珠』を以つてした。時に二二年七月二二日で、この編輯は主として松山松太郎の手になつた。時に前大教校監事服部範嶺及び普通教校教師手島春治等またこの挙に賛して応援し、前期四名に加つて六名創立委員となり、本会事業の要領其他諸規則を定め、乃ち大洲鉄然・赤松連城・島地黙雷等の宿老初め内外縉素の徳望ある在郷諸士に計つたところ、皆これにを賛助し大に奨励するところがあつた：二二年一月宣教会本部から、これとは別個に『海外仏教事情』を創刊した。これは海外に於ける仏教に関する論説・批判・消息等を和訳輯録せるものであるが、この企図は時宜に適して一般の好評を受け、本誌第一集の如きは初刷五千部、翌二二月第二刷四千部を印刷し、更に翌年三月第三刷を刊行した程である：同じき二二年八月の頃布哇出張中の曜日蒼龍は、宣教会事業の一として該地の布教に従事することになつてゐる：本会が海外

に仏教を伝え、また彼の地の仏教事情をわが国に認識せしめ、その醸成する雰囲気の中から、やがて多数の海外伝道者を輩出せしめた功績は特記せるべきものである

（龍谷「一九三九」八一八〜八二二頁）

当時、大教校などを中心として結成されていた真宗青年伝道会も、明治二二年六月には、単身布哇に航して仏教会堂を建てんとする曜日蒼龍の事業を助け、資金及び書物を募集してこれを寄贈し「たのである」（龍谷「一九三九」八二五頁）。

同様の記述は『布哇日本人發展史』にも、

氏（蒼龍引用者註）は我が布哇移民の教漸く殖ゆるを見て、西本願寺に請ひ其援助を得て在留同胞者間に伝道布教を開かんと欲したけれども、本山にては当時未だ布哇の実情を視察せず為めに其要求を容るゝ事能はず。此に於て曜日師は単独蹴起して布哇に來り、先づホノル、市に上陸し、當時在留民は概して仏教徒なりしが故に師は大に奮闘の結果忽ち一団体を組織し得てホノル、市に布教出張所を建設する計画を立て、本山に請願して相当の保護を乞はんと欲し一旦帰国し、本山に之れを計りしも本山未だ之を許さざりしか、當時京都に海外宣教会なるもの有りて同会は大に之れを賛し其一部の事業として決行する事となり。同時に本山亦之れに対して補助を為す可き旨を全国に誘導せしを以て、同師は此に大に力を得て資本金の蒐集に便利を得たるものなり（10）

とある。蒼龍は同二二年

一〇月一日、第九回船山城丸入港に付ボートを雇ひ直に本船に至れば、西沢道朗・後藤三治の両君の在るあり。相見て相喜び直に相伴ひ本院に帰る。予は今回幸いに予期の如く西沢氏と相見えたるを以て、愈一応帰国するに決せり。爾るに素と三・五年を期するの事業にして、未だ一片の郷思をも醸さ、りしが、左記の布哇教用の為めなれば、日本に帰るも猶布哇の用をなすものなれば、突然帰国すること、はなれり。併し用向済み次第に再遊の胸算なり。其帰国用の要点を記さば、①大法主殿へ建言件、②御消息下附願、③本尊供奉と仏具購求、④別院に引直し願、⑤本利の補助金願、⑥山口・広島両県を始め各府県有志へ本院創立喜捨金勸募件、等の為めなり：一九日午前九時、横浜着港 (曜日「二八九〇」三一頁)

と再渡航の思いを胸に抱いて帰国していく。蒼龍帰国後のハワイ開教の状況については、

曜日蒼龍師の一旦帰朝せらるゝ哉、木村斎治氏は師の代理として来りし西沢某を該教会堂に駐在せしめ布教事業の端緒を開かしたるが、後ち明治二二年、蒲行也師、単独布哇に來り當時同胞移民の數ホノル、府よりもヒロの地に多數を留せしに依り、師は先づヒロ市に駐錫する事となれり。素より師は本山と關係あるに非らず、然るに蒲生師の來る哉西沢氏に代りて該会堂に居る事となれり。當時更に姫路徳雄・荻野行運等の人も単独ヒロに來れり。元來、ヒロ教会堂には其建築の際未だ多少の負債を残せしかば為めに、姫路・荻野の両氏が蒲行也氏等と一団になるに及び、右両師は負債償却の故を以て各耕地に寄附金募集に巡行中、遂に中途より本国に帰るの失態を演じ、或は統一なき彼等宗教家は各自独立の意見を持じ行

動を異にする等に依りて、仏教の布教傳播に就ては幾度か頓挫を重ね、折角進行し來りし開教も為めに一大打撃を受くるに至りしものなり：彼等移民の殆んど凡てが仏教徒なりしだけに、之が渴仰の念禁じ能はざるの秋、恰も好し幾多の日本宗教家の入り來りて我國仏教の傳播布教に着手したる事とて在留出稼移民の喜謔亦驚ふるに物なきの有様なりしが故に、敢て之等の無知なる同胞労働者を瞞着愚弄したるが如き：此の如き混沌たる社会に在りて蒲行也氏は四年の永き間悪戦苦闘を続け、専心仏教の傳播普及に努力したるものなりしが、此の時迄真宗本願寺は未だ何等の干渉を試みず、唯袖手傍觀の地に立てるも、斯る失体と弊害を惹起せるを顧みざる事は本山の体面を汚し宗教家たる可き地位人格を失墜するの甚敷きもの在ると同時に又我出稼移民の年々歳々倍増加するの一方にして、最早之れを黙視するを許さざる所にして、又布教事業の救済普及の必要を促すに至れり。茲に於て、本山も遂に明治三五年五月視察員として宮本惠順師を派遣するに至れるものなり

(森田「一九一五」三二八〜三二九頁)

との記述がなされている。蒼龍帰国後はさまざまな情報が錯綜し、日本との距離からも正確な情報が伝わらず、現地のメンバーも含めてハワイ開教がやや混乱状態にあったことが想像される。

蒼龍の『布哇紀行』は、開教を後援した人物や団体に対しての「ハワイ開教報告書」というものでもあったと考えられる。また、蒼龍帰国後にハワイに赴任した初期開教に携わった僧侶は、実際にそのほとんどが東陽学寮関係の人物であった(関係者一覽表 参照)。

〔関係者一覧表〕

◎…ハワイ初期開教関係者 ○…蒼龍が派遣を予定していた人物

東陽円月 (東陽学寮)

◎ 暁日蒼龍 (円月甥)

◎ 西沢道朗

◎ 蒲生行也 [蒲 (蒲之坊) 雲涯]

真田増丸 (濟世軍)

◎ 荻野行運

◎ 姫路徳成 [雄?]

◎ 桑原覚成

◎ 金森 [安?] 三寿

◎ 佐藤行信

◎ 暁日蒼龍

◎ 藤村僧翼 (蒼龍弟)

◎ 阿部定映

◎ 高山道円 (阿部定映弟)

◎ 国崎法順

◎ 児玉誠諦 (蒼龍とは無関係の人物か?)

◎ 真田賢順 (真田増丸弟)

◎ 梅高秀山

◎ 工藤誓行

◎ 高田誘成

三 ハワイ初期開教と九州における真宗ネットワークの関係

大きく「海外開教」という観点から考えてみるならば、九州は地の利からも適した場所であったと言いうるのである。大谷派の小栗栖香頂 (以下、香頂・一八三二〜一九〇五) らがすでに明治初期、中国開教に

出立していた事実も (参考 高山「二〇〇八」)、本願寺派や近郊に住む僧侶たちに多大な影響を与えたことが考えられる。

ここでは、現在の大分県及び周辺地域に存在した学寮に着目しつつ、学寮内での師弟関係などの中でどのようなネットワークが形成され、本願寺派のハワイ開教につながっていったのかということについて見ておく(11)。

最終的には、蒼龍がどのようなネットワークの中でハワイ開教を思い立ち、実際に開教に出立していったのかというその過程を明らかにしていくことが目標となる。そのための作業として蒼龍の出身地周辺の真宗ネットワークについてまず見ていくが、ここで藤井健志氏の蒼龍の位置についての言及を参照しておきたい。

藤井氏は、真田増丸に関する論文の中で蒼龍についてもふれ、蒼龍は「明治二年、初めてハワイで仏教を布教したことで知られているが、彼は円月の弟の子で、かつ円月の娘と結婚しており、東陽学寮の門人の一人だった。円月はハワイに出発する蒼龍に長編の詩を贈ったというし、蒼龍のハワイ渡航資金は、前述の小今井乗桂(12)が出したらしい。そこに円月が蒼龍を激励した様子が感じられるし、円月の支持がなければハワイ渡航はできなかったのではないだろうか。さらに蒼龍が呼び寄せ、蒼龍の帰国後もハワイで布教をした西沢道朗も東陽学寮を出たという：なお蒼龍の弟でハワイ布教中に客死した藤村僧翼がハワイへ出立する時の送別会 (明治四二年頃という) には真田増丸も出席しており、また増丸自身の弟真田賢順も開教師としてハワイへ行っている。こうしてみると、ハワイへ行った開教使たちの一部は、円月―円成と続く東陽学寮を中心とした人脈の中から出ていたことになる。以上のような点から東陽学寮は開教の一つの拠点だったとも言えるのである」と述べている(13)。つまり、蒼龍が海外への視点を開かれていった背景として、師の東陽

円月（一八一八〜一九〇二）からの東陽学寮内における薫陶があったことが考えられる。円月と蒼龍の間には師弟関係に加えて親戚関係もあり、円月が東陽学寮を再興し周辺地域の僧侶を育成していたことはハワイ初期開教に直接繋がっていくと思われる。さらに蒼龍の出身地である国東半島は、円月の寺院及び学寮からそれほど遠くないという距離的な利点もあった。

明治初期の大分地域は、学問的にも高い水準であったと想像される。本稿では詳しくふれる余裕がないが、近世にしばしば噴出した異安心事件の影響で本山（西本願寺）の権威が低下し、相対的に各地域の教学の地位が高まるという状況も起こっていた。地方の学寮はそれぞれが特色を有しており、学問的な発言権もあったことで知られている。また明治中期以降は、学校制度も整備され次第に京都が名実ともに学問の中心となっていくが、この時期は近世からの移行期でまだ流動的な頃であり、なおかつ京都への交通の便が決して整備されていなかったことから（14）、九州や中国地方などの各地域ごとに学寮が存在し、著名な学匠の指導のもとに独自の威容を誇り、多数の学僧を輩出していたのである（15）。

ただし円月について追悼文などの中に、円月の海外開教への思いを物語る資料は、現在の調査の限りでは直接には出てこない（参考『恩師』・『先哲』）。しかし、可能性の一つとして考えられることは香頂による中国開教が与えた影響である。香頂の出身寺院も大分であり、円月は香頂の存在を知っていたであろう。そのことが、門下生への海外開教の勧奨につながったのではないだろうか。また円月は、明治一二年の本山東京移転事件の際に熊本の原口針水（一八〇八〜一八九三（16））や鬼木沃州（一八一八〜一八八四）らとともに宗学部に出仕していることから（参考『寺史』一八六頁・藤井「一九八六」五二頁）、当時の東京の

状況を知悉していたと考えられ、日本仏教の海外展開の必要性を強く感じていたと想像される。

ここからは日浦保徳氏と常光浩然氏の著書に基づいて、蒼龍とともにハワイ初期開教に関わった人物群について見ていきたい。

日浦保徳氏は、香頂以来、「東西本願寺の真宗僧たちは、親鸞聖人のみ教えを、遠く海をこえて朝鮮・シベリヤ・ハワイ・アメリカ・南洋・千島とつぎつぎと開教していったが、最初の開教使はすべて九州人であった」とする（日浦「一九七〇」九七〜九八頁）。

実際に香頂をはじめ、ウラジオストクに最初に赴任した多門速明は佐賀の出身であり、蒼龍は大分、明治二六年にシカゴ万国宗教大会に参加した八淵「淵」蟠龍（一八四八〜一九二六）や加藤恵証（一八五八〜一九一六）も熊本出身と、海外に出立する僧侶たちが九州の地に続々と登場した様子が窺える（参考 日浦「一九七〇」九八頁）。

そのような中で蒼龍は、「布哇に帰って、日本人の労働の状況、精神生活等を観察して、仏教の伝道の重要性を痛感し、これが遂行には少くも数名の、同志の協力の必要を認め、彼の志願に協力すると覚しき同志に、手紙を出して布哇渡航を勧誘した。その内の一人に西沢道朗があった」（常光「一九七二」四九頁）。先述したように、蒼龍が開教のバトンを渡して帰国したこの西沢道朗（一八五六〜一九一一）という人物も、初期ハワイ開教関係者である（17）。

帰国後の蒼龍は、当時の本願寺派全体の海外開教熱の高まりにも後援を受けつつ、『伝道会雑誌』記者に開教に対する抱負や将来の計画を語っていく（日浦「一九七〇」一一九〜一二三頁・常光「一九七二」五二〜五七頁）。

この中で蒼龍は、寺院としてはホノルルの本院を含めて合計一〇ヶ所の教場設置が必要であるとし、今後ますますハワイ移民の増加が予想さ

れるため、布教の方策をきちんと立てるべきであるとしている。そしてそのためには人員がある程度派遣されなければならないとし、「以上一〇ヶの教場を設置せるに於ては、其布教員少くとも六、七名を要すべし。而して今や西沢道朗氏は己に該地に在り、予亦来陽には更に梅高秀山・工藤誓行・高田誘成・蒲雲涯等の諸氏と同航せんことを約せり」と、具体的な人物名を列挙しこれからの計画について述べている。

しかし蒼龍の計画は種々の事情変化により頓挫を来し⁽¹⁸⁾、日浦氏は開教同行予定者の中で「蒼龍ハワイ布教挫折ののちハワイ渡航したるは、蒲雲涯のみという」としている（日浦「一九七〇」一二二頁）。ただし、「正式開教までヒロ別院の法灯を絶えなかつた人たちの名前をあげよう。西沢道朗・蒲生行也・姫路徳応・荻野行運・桑原覚成・金森三寿・佐藤行信の七名である。この中で、蒲生と荻野の二名が福井県の人、あとの五人は山口県人である。以上の七名の開教僧は、曜日蒼龍とともに四日市別院輪番・東陽円月のもとに真宗学を学んだ門弟といわれ」というと、関係者がいずれも円月門下であったことを強調している（日浦「一九七〇」一二二頁）。

この頃の蒼龍を取り巻いていた状況は、中西直樹氏によれば、「曜日が自らの布教方針をもっとも明確に示したものは、一八八九年二月二一日発行の『伝道会雑誌』第一九号に掲載されており、常光の『布哇仏教史話』（五二―五三頁）にも転載されている。これを見ると、曜日の関心事が、教義上のことより、出稼ぎ者の実態に即して、どのような布教体制を構築するかに向けられたことを理解できる。そして、そのための具体的方策として、自分の父であり岳父でもあった東陽円月の門下生を中心に開教活動を展開する計画が立てられている。本山側が問題視したのは、まさにこの点ではなかつたかと考えられる。当時、九州には宗派を超えた『九州仏教団』と称する組織が運動を活発化させつつあった。

本山の統制を脱する方向性を見せはじめた九州で、豊後の東陽円月の一門が、独自にハワイへと布教を広げていくことに本山中枢部は危惧を抱いたものと考えられる。このように考えると、曜日への支援撤回が表明された二ヵ月後に起こった東陽円月の異安心事件（『龍谷大学三百年史』八七七頁参照）も、本山の地方統制路線と無関係に考えることはできない。また、その後においても、開教事業を本山統制下に置くことは、本山首脳部にとって最大の関心事であったのである」とされている（中西「二〇〇八」一四―一五頁）。

真宗ネットワークは、円月門下において著しい発展を見せており、東陽学寮や乗桂校で教育を受けた僧侶を中心とした人たちが開教活動などに転化していくことにより、本願寺派内部でも大きな注目を集めた存在であったと考えられる。しかしながら、近世後半から明治初頭にかけて進展し続けた真宗ネットワークは、明治中期以降の本山による統制策の中で次第に衰退していくこととなっていくのである。

おわりに

本稿は、将来的に他の仏教者同士のコネクションや別の地域における「九州における真宗ネットワーク」の全体像を明らかにしていくための、あくまでも中間報告にすぎない。

ただし、近代を迎え海外への視点が開かれた日本人にとって、海外は出立していく具体的な場所として認識されるようになっていった。近代化をはかる必要に迫られていた仏教諸教団にとってもこの流れは必然であると同認識され、その過程の中でハワイ開教が実施されていったのである。実際に蒼龍を中心としたハワイ初期開教は、決して偶然的の産物などではなく仏教教団の近代活動の一環であった。

近世後期から九州で段階的に醸成された真宗ネットワークは、海外に

開かれていく近代の仏教教団にとっても、当初は有益な存在として認識され、機能していったと考えられる。真宗ネットワークは、あくまでも僧侶を中心とした結合形態であったが、この集団には近世の在地状況を踏まえた、仏教の近代的あり方を見て取る事が可能である。換言するならば、真宗ネットワークを明らかにすることは、近世と近代の間における仏教の連続と断絶という側面を深化させることにもつながっていくかもしれない。

初期開教を直接継承する後継者こそ、諸事情もあり、真宗ネットワーク内部で育成がうまくできなかったものの、蒼龍の行動は本願寺派として、それ以降のハワイにおける開教活動の大きな起点となった事象である。なおかつ、その後、陸続と展開する仏教諸宗派のハワイ開教全体にとっても、蒼龍らの開教活動は最初の大きな一歩であったと評価することができようであろう。

ここでは、蒼龍がハワイ開教に赴いていく背景として、師の円月を中心とした九州における真宗ネットワークの存在が考えられることを指摘した。

現在の観点から見れば、九州は必ずしも仏教（真宗・両本願寺）教団にとって中心に位置しているとはいえないかもしれない。しかしながら、蒼龍や増丸らが生きた明治初頭の時期の九州は、学寮や縁戚関係を紐帯とした仏教者のネットワークが具体的に存在し、かつ有機的に機能していたと考えられるのである。

註

- (1) 参考 柏原「一九九〇」六三〜七〇頁・守屋「二〇〇八」一一六頁・Ama「二〇〇九」一一二頁。なお開教の定義については、高山「二〇〇一〇」(三二八頁)を参照されたい。また安中尚史氏は、海外布教を「植民

地布教」と「移民布教」に分類しているが(安中「二〇〇八」一一二頁)、本稿では後者の「移民布教」について検討していくこととなる。

(2) 藤井健志氏はこうした「ネットワーク」について、「学僧との師弟関係は寺院を中心とした関係のように自然に生じたものではなく、弟子となる人々の意志に基づいていた。学寮を中心とする人間関係は、教団の枠をこえないという意味では寺院を中心とした関係に似ているが、むしろ教団外の仏教運動に近い。このように考えると学寮を中心として、寺檀関係とは異なる人間関係のネットワークがゆるやかに形成されていたということが可能」と述べている(藤井「一九八七」一六六頁)。この指摘を踏まえ、本稿では近世後期から近代初頭における、僧侶間ネットワークの内実と構造などに関する検討を行っていく。

(3) 高橋典史氏も、「近代以降、日本をルーツとする多くの宗教集団が、日本の帝国主義的な領土拡張や海外への移民の増加という海外膨張の趨勢のなかで、海外地域で多様な活動を行っていた事実も看過できない」と見ていく(高橋「二〇〇八」八四頁)。

(4) データにより、これを実証したのは児玉正昭氏である。児玉氏は、官約移民の「移民数を府県別にみると、広島県三八・二%、山口県三五・八%と両県が圧倒的に多く、全国の七四・〇%を占めている。次いで熊本県一四・六%、福岡県七・五%となり、四県を合計すると実に九六・一%に達する。このように、移民数が特定の四県に集中していることが大きな特徴である」とする(児玉「一九九二」二五頁)。参考 守屋「二〇〇八」一六〜一七頁。

(5) 「本願寺開教の第一歩に於て、其成功を資けし他の因あり。そは当地に渡航せる同胞の多くは、広島県、山口県、熊本県、福岡県等、故国に於て真宗法義繁昌せる地方の出身者なること是なり」(『本派』二七頁)。参考 藤井「二〇〇〇」四八頁。

(6) 参考「広島県移住史年表」、『通史編』・石川「一九七九」・藤井「一九七九」・天沼「二〇〇八」。

(7) 守屋友江氏は、「近代真宗は日本の国策に則ったかたちで海外進出していったのだが、地域としては東アジアを中心に北米、ハワイ、千島、樺太

から南洋など広範囲に勢力を伸ばしている」とする(守屋「二〇二」五三頁。参考『アジア』)。

(8) 島田「二〇四」一三五〜一三七頁。鷲見定信氏も、ハワイ「布教の目的は日本人移民の宗教的救済だけでなく、風紀の乱れ、キリスト教化の防止などであった。移民の人びとへの布教という目的はその後のハワイの仏教の性格を決定したと言えり」とし、「初期の仏教は移民一世を布教対象としていたから、日本の仏教をそのまま導入することに問題はなかった。しかも、伝統的な日本仏教の教えや儀礼をハワイに持ち込んだというだけではなかった。ハワイ移民の統合と言う役割も求められたのである。仏教は宗教的役割とともに、移民の生活、文化、社会の全般に渡る統合的な役割とともに伝統的な日本文化の維持、日本人としてのアイデンティティを保護することにもなった」と、開教を位置付けている(鷲見「二〇四」一一六〜一一八頁)。

(9) 蒼龍については、「円月の門人。円月の娘で円成の姉である『すず』と結婚し円月にとっては甥にあたる。(光徳)引用者註。寺の第二世住職である。長じて『東陽学寮』に入り、宗学を修める。その後、大学林に入學してさらに研鑽を積んだ。蒼龍は慈悲あふれる情熱の人であった。明治二二年(一八八八)頃、東京滞在中、新聞雑誌でハワイに在留する日本人の精神生活の寂寥、殊に真宗の信者同胞が異宗教の中にあつて呻吟している有り様を知って奮然としてハワイ開教を決意したといわれる。翌二三年妻子を残し、渡航費も一切自分で調達して本山の許可を得て、単身ハワイに渡航した。ハワイでは未知の異境の山野を跋渉して、一日も休むことなく在留邦人に布教伝道をつづけ、大きな成果をあげた。いわば蒼龍は『ハワイ開教の元祖』といわれるべき人である」とする整理がある(『先哲』二六頁・常光「一九六八」一九三〜二〇一頁・日浦「一九七〇」一〇一〜一一七頁)。

蒼龍がハワイに赴いた頃の状況については、與世盛智海氏の講演に詳しい。與世盛氏は、「ハワイのそういう事情を聞いて、これは何とかしなければいけない、ハワイに行って仏教を広めたいという方が出てきました。特にハワイは、移民として来ているのは、広島、山口、あるいは九州の熊

本、福岡といった浄土真宗の信者の多い土地からの移民の人が多かったわけです。この浄土真宗の信者はほとんど西本願寺の系統ばかりでした。こういう人たちを何とか、もっと生きがいのある生活をさせたい、どうにかしなきゃいけないということで立ち上がった方が、曜日蒼龍という大分県の僧侶です。この曜日蒼龍さんという方は、大分県の中津近くの出身なんです。そこは中津を中心として、いわゆる豊前学派というものが非常に栄えていた時代なんです。月珠和尚の弟子に、東陽円月和尚という方がおられ、のちに学校を創られますが、この東陽円月さんのお嬢さんと結婚されたのが、曜日蒼龍さんだったわけですよ。(蒼龍は引用者註)一八八九年、三月二日にハワイに上陸した」と語っている(與世盛「二〇六」三九〜四〇頁)。

さらに宮林昭彦氏も、「仏教の僧侶による伝道はキリスト教より二年おくれて、一八八九年(明治二二)にはじめられた。それは本派本願寺の僧侶、曜日蒼龍師がハワイに渡り、ホノルルを中心に各島において、日本人に布教した。かれは日本の中国地方、九州の真宗系の多いハワイ移民の人々に仏教の伝道の必要性を痛感し渡航し布教活動を行ったのであり、仏教僧侶としては最初である。ただし、ハワイという異文化圏であるので、仏教とキリスト教の神の同一性を主張して、同化するための方法を用いて布教活動をつづけ、やがて布教所の開設も計画したが、本山は曜日主張を受けず、援助を打ち切り、ついにハワイ布教所の設立は実現しなかった」と述べている(宮林「一九八二」一六頁)。

(10) 森田「一九一五」三三六〜三三七頁(適頁、句読点を付した)。この時の状況は、「ハワイ開教は、明治二三年(一八八九)三月、明如宗主のゆるしを得て、曜日蒼龍師が渡布したのが嚆矢である。師の滞在はわずか半年であったが、ホノルルとヒロに仮布教所を設けている」というものであった(大谷「二〇〇二」二四四頁)。

(11) 藤井健志氏は、「東陽学寮は様々な宗教活動の拠点であり、その出身者は多彩な活動を示した。今まで個々バラバラしか見えなかった僧侶の諸活動が、学寮という視点を通して見ると結びついてくるのである。曜日蒼龍による初めてのハワイ布教。真田増丸の仏教救世軍。これらは、東陽

学寮という媒介項を一つ設けてやれば、すべてくつついてくる（各人が互いに知り合っていたのは間違いない）。このことは結節点としての東陽学寮の重要性を示しており、そこを中心に一つの人脈のネットワークが広がっていたことを示している。こうしたネットワークは他の学寮に関しても存在していたと思われる。このネットワークを可能な限り明らかにして、多くの宗教活動の関連を探り、そこに思想的なつながりを見出すことは今後の近代仏教研究の一つの重要な視点になるのではないだろうか」とする見方を提示している（藤井「一九八六」五二～五三頁）。

なお藤井氏は、仏教の海外布教に関する「研究は八〇年代後半に増えてくるが、東アジアを研究する仏教史グループと、南北アメリカを研究する宗教社会学グループとに分かれており、両者の交流は少ない。関心の持ち方の相違が主な原因である」と述べる（藤井「二〇〇〇」四七頁）。「真宗ネットワーク」の存在を措定することは、これらの研究グループの結節点の一つとして、九州という地域があったことを考え直すための契機ともなるのではないだろうか。

さらに、これは直接的には香頂や松嶋善譲らに関わってくることであるが、広瀬淡窓の咸宜園における勸学ネットワークの存在も考えられる。真宗僧侶と咸宜園の関係について井上義巳氏は、「九州以外では長門、周防、安芸、摂津、美濃など、いわゆる先進地域からの入門者が、僧侶の場合でも多数である……これらの先進地域はいわゆる寺子屋での初等程度の教養以上の知識を必要とする社会の発達度があり、また遠方への遊学を可能にする経済力が存在していた。そして僧侶の場合、これら先進地域では寺院を支える経済力が豊かであったこと、さらに寺院への奉納が貨幣でなされる、すなわち貨幣が寺院経済の中心となることも、他の地方に比して格段に進んでいた。これは寺院がその子弟や門弟を遊学させるに極めて有利な条件であった。この点咸宜園入門者を最も多く送ったのは浄土真宗であった……僧侶入門者のほぼ三分の二が浄土真宗と推定される……浄土真宗が強固な門徒集団を組織して教勢を伸ばしていたところが上記先進地域であった」と述べている（井上「一九八七」二二七頁。参考 川邊「二〇〇九」五頁）。

(12) 蒼龍らの真宗ネットワークを考えるに際して、この乗桂（一八一四～

八八七）という人物は大変重要になつてくる。乗桂は大部分の宇島の商人であり、明治九年には京都の本山立学校設立に対して一〇〇〇円の寄付をした功績により明如から親筆を授かるなど、本願寺に対してもしばしば多額の寄付を行い「乗桂」の法名を受けた。さらに、本願寺が宇島教務所内に開設した開闢教校閉鎖の跡を引き継ぎ、経費の一切を支出し明治二二年以降「乗桂校」として経営していく。円月とも交流があり、自らが開設した乗桂校の教授として円月を招聘した（参考 龍谷「一九三九」六四三頁・井上「一九七九」三三～三五頁・大江「一九八八」一三～一九頁）。また、乗桂の後継ぎに円月の二男が予定されていたとして、両者の交遊の深さを示す記録もある（大江「一九八八」九～一〇頁）。

(13) 藤井「一九八六」五二～五三頁。本稿の作業はこの藤井氏の視点を、蒼龍を基軸として、開教や寺檀関係外ネットワークという観点からさらに深めていくことでもある。

なお、円月の門弟、豊前学派の僧たちは、鹿児島開教、北海道開教、そして日本仏教の海外伝道に、支那・シベリア・アメリカへと旅立った。明治二二年、円月の甥、曜日蒼龍（白野光徳寺）がハワイに渡航、キリスト教団に伝道した事は快挙で、まさに一三〇〇余年の昔、支那の玄奘三蔵が求法のため、ヒマラヤ山を越えて、インドに旅した事跡にも比すべきものであった」とする記述もある（「光雲」「西光寺報」一一一―一―号、一九九四年）。

(14) 昔の寺の僧侶は不便、且つ貧困の中に、日田の咸宜園……等で先づ漢籍を学び、その上で今津の浄光寺の月珠勸学の門や、中津の照雲寺の善讓勸学の門に入り、真宗教学の研鑽に専念されたもので、京都の御本山の大学林にそれから進学する方は、余程恵まれた方でありました。それが明治一〇年に宇島説教所（掛所）に開闢教校が出来、更に明治二二年に長願「四」寺に小今井乗桂校が出来て、自坊の法務を営み乍ら、真宗の教義を学ぶことができるようになり有り難かった」とする祖母の話を、大江哲成氏が記録している（大江「一九八八」二頁）。

(15) 参考 藤井「一九八六」四七～五〇頁。また藤井健志氏は、「真田増丸と濟世軍に關係する豊前にも学寮の数は多い……このように学寮を中心とし

た学僧の活動は、一つはそこが宗学の拠点として各地から多くの僧侶を集めていたこと、一つは幕末明治期の著名な僧が多くそこにかかわっていたことで、本願寺派教団の歴史上で大きな重要性をもっている。しかしこうした学僧たちの活動は、時には寺壇関係を軸にした日常的な寺院の活動と抵触することがあった」と述べている(藤井「一九八六」四八頁)。

島地黙雷も「針水和尚肖像賛史」(『島地黙雷全集・五』三四六頁)において、明治初頭「九州にては僧亮・寛寧・断鐘(皆肥後人)、善議・宣正(皆豊前人)の如き、学徒何れも千里を負て至る者数百人を育せり。今古比対するに、殆んど盛衰の感に堪ざるなり」と記している。なお、黙雷自身は四月のライバルでもあった松島善議に入門しようとして善議が京都に居たためそれが果たせず、針水の門弟となっている。

また、九州地方の「主な先哲(真宗の学僧)について」は内田「一九七六」に詳しい。

(16) この針水は島地黙雷の師でもあり、長崎で一八六二年に外国教師からキリスト教の大意を学び、一八六九年には西本願寺の安居で『出埃及記』の講義を行うなど海外への視点を有していた僧侶であった。黙雷の手になる『針水和尚略伝』(『島地黙雷全集・五』三四二頁)にも、「文久三年、五六歳にて長崎に遊び、外教師に就いて洋教の大略をも学べり」とある。その結果として、「破邪の事に於ては和尚を以て第一位に推す事となり」(明治引用者註)二年、安居副講の時も傍ら破邪書を講じ「たとえられて(針水和尚肖像賛史)『島地黙雷全集・五』三四七頁)。

九州の真宗ネットワークは、現在の県の枠組みを越えて存在していたが、特に大分県・熊本県・福岡県の三県は、学閥や学僧同士の交遊からも密接な結びつきがあったと考えられる。また長崎が海外とも距離的に近い場所であり、長崎を起点に近代初頭の海外開教が行われていったことも関わりがあると考えられる(参考 高山「二〇〇八」)。さらに先述したように、ハワイへの移民数において熊本県や福岡県が上位であった事実も、蒼龍のハワイ開教が四月の勧めを承けたものであることを物語っているのではないかと思われる。

(17) 道朗の略歴については、「安政二年、大分県中津市、寺西家に生まれる。

下関、西澤家に入り商業に従事するが、縁あって下関市光明寺の衆徒となる。善議、行忍、靈瑞等の法哲を歴訪して宗学を研鑽する。明治二年九月より二四年三月まで本願寺命を受けハワイ巡錫する。明治二四年一〇月、中津に杜開学寮を開設し寺院子弟数十人の教育を始め二〇余年持續する」とある(『教正寺』六頁。参考「西沢道朗和上小伝」『二種深信問答記』・井上「一九七九」二五八頁)。なお道朗の生没年は、資料によって多少違いがある。

(18) 常光浩然氏は、この間の事情について『新布哇』の文章を引用しつつ、「同氏(蒼龍引用者註)は其建築費の一部と其他諸般の応援を請はん為め、一旦帰国して本山に其事を計る、然るに本山はまだ之を許さざりしに、当時京都には海外宣教会の組織さるあり。同会は大に之を賛し、其一部の事業として決行さるる事となり、布哇開教事務所は其中に設置せらる。同時に本山のに対して補助の旨を全国に誘導せしを以て、同氏は此に大に力を得て、資本金蒐集の便利を得たり。而も遂に其成功を見る能はざるに至りしものは、某宗教雑誌に於て、氏は海外布教をなすには、其教法中に神の存在を認むるものならざれば海外諸邦の中に其布教を国法に禁止せり。故に我仏教も其本尊をゴットと団体異名にすべしとの方便説を唱へしを以て、異論百出頗る攻撃を受け、遂に同情者の欽心と本山の応援を失ししを以て、其苦心經營は全く水泡に帰するに至りぬ。然るにホノルルの団体間には、既に応分の寄附金も集り、ペニタニア街に地所を購い、専ら出張所建設の運動なりしに、氏が本国に於て失敗と前後して、団体中に一の葛藤を生じ折角の好事業も、終に空しく雲散霧消の中に葬らるるに至れり(新布哇)／＼」に於て曜日進退全くきわまつた。曜日は何としても今一度布哇に引き返して、自己の事業の結末をつけたい気持ちであった。然るに彼の師父にも相当する東陽四月は、再度の渡布に反対した。四月は篤学の人であり、且また本山に忠実な僧侶であったので、強いて事を構えることを好まなかつたのであろう。かくして曜日は涙を呑んで大分県の自分の寺に引退し、ついには僧籍を脱退して謹慎の生活に入ったのである」と述べている(常光「一九七二」五五五・五六頁)。

参考文献

- 『大分の先哲を訪ねて』(龍谷教学会議大分大会、一九九五年) ↓ 『先哲』
 『恩師を追慕して』(重信珠雄、一九二七年) ↓ 『恩師』
 『海外開教要覽』(海外開教要覽刊行委員会、一九七四年)
 『教正寺のあゆみ』(平等山教正寺、一九八六年) ↓ 『教正寺』
 『浄土真宗本願寺派アジア開教史』(本願寺出版社、二〇〇八年)
 ↓ 『アジア』
 『真宗人名辞典』(法蔵館、一九九九年)
 『ハワイ開教小史—ハワイ本派本願寺—』(百華苑、一九九九年)
 『ハワイ浄土宗教団宗教学情調査報告書』(ハワイ浄土宗教団宗教学情調査
 団、一九八二年)
 『布哇本派本願寺教団沿革誌』(布哇本派本願寺教団、一九五四年)
 『広島県移住史 資料編』(広島県、一九九一年) ↓ 『資料編』
 『広島県移住史 通史編』(広島県、一九九三年) ↓ 『通史編』
 『本願寺史・三』(浄土真宗本願寺派、一九六九年) ↓ 『寺史』
 『本派本願寺布哇開教史』(本派本願寺布哇開教教務所文書部、
 一九八八年) ↓ 『本派』
 『本派本願寺布哇開教三五年紀要』(本派本願寺布哇開教教務所文書部、
 一九三二年)
 『明如上人伝』(明如上人廿五回忌臨時法要事務所、一九二七年)
 『龍谷大学三百年史』(龍谷大学、一九三九年) ↓ 龍谷 [一九三九]
*A Grateful Past, A Promising Future: Hopka Hongwanji Mission of Hawaii 100
 Year History, 1889-1989* (Honolulu: Centennial Publication Committee,
 1989)
 天沼 香『故国を忘れず新天地を拓く—移民から見る近代日本—』
 (新潮社、二〇〇八年)
 飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』(ナカニシヤ出版、二〇〇三年)
 石川友紀『日本移民の地理学的研究』(榕樹書林、一九九七年)
 井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』(永田文昌堂、一九七九年)
 井上義巳『広瀬淡窓』(吉川弘文館、一九八七年)
 大江哲成『妙好人小今井兼桂翁』(私家版、一九八八年)
 大谷光昭『法縁—抄—勝如上人の九〇年—』(本願寺出版社、
 二〇〇二年)
 岡部牧夫『海を渡った日本人』(山川出版社、二〇〇二年)
 曜日蒼龍『再版 布哇紀行』(曜日蒼龍、一九九〇年)
 柏原祐泉『日本仏教史 近代』(吉川弘文館、一九九〇年)
 尻玉正昭『日本移民史研究序説』(溪水社、一九九二年)
 島地黙雷『島地黙雷全集・五』(本願寺出版部、一九七八年)
 鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』(平凡社、一九九二年)
 常光浩然『編 日本仏教渡来史』(仏教出版局、一九六四年)
 常光浩然『布哇仏教史話—日本仏教の東漸—』(仏教伝道協会、
 一九七一年)
 土井彌太郎『山口県大島郡ハワイ移民史』(マツノ書店、一九八〇年)
 日浦保徳『九州真宗史と四日市別院』(本願寺四日市別院、一九七〇年)
 森田栄・編『布哇日本人発展史』(真栄館、一九一五年)
 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』(現代史料出版、二〇〇二年)
 矢口祐人『ハワイの歴史と文化』(中央公論新社、二〇〇二年)
 柳川啓一、他・編『ハワイ日系宗教の展開と現況—ハワイ日系人宗教調査
 中間報告—』(東京大学宗教学研究室、一九七九年)
 『明治真宗私塾学寮一覽(昭和五年七月調査)』(龍谷大学論叢、二九三号、
 一九三〇年)
 Ana Michiru, "Rethinking Kaiyo (Overseas Propagation of Japanese
 Buddhism): Integrating Perspective from Both Sides" (*The Eastern Buddhist*,
 vol.40-1&2, 2009)
 安中尚史『近代日蓮宗の海外布教に関する一考察—植民地布教と移民布教
 を比較して—』(『日蓮教学研究所紀要』三三三号、二〇〇八年)
 石川友紀『海外移住の歴史的要因』(『海外移住の意義を求めて』外務省国
 際協力事業団、一九七九年)
 内田時哉『九州の真宗学事史概観—龍谷教学』一一号、一九七六年)
 川邊雄大『幕末明治期の咸宜園と真宗僧—松本白華と小栗憲一を中心に—』

『淡窓研究会会報』四号、二〇〇九年
島田法子「仏教―信教の自由と愛国心」『戦争と移民の社会史』現代史料出版、二〇〇四年

高橋典史「二〇世紀初頭のハワイ日系仏教における二重のナショナルリス

ム」の出現」『ソシオロギス』No.三三、二〇〇八年

高山秀嗣「真宗大谷派の初期中国開教について」『東アジア仏教研究』

六号、二〇〇八年

高山秀嗣「海外開教史上における大谷光瑞」『二松学舎大学論集』五二号、

二〇〇九年

高山秀嗣「本願寺の海外布教」『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主

義者の軌跡―』勉誠出版、二〇一〇年

常光浩然「曙日蒼龍」『明治の仏教者・上』春秋社、一九六八年

中西直樹「仏教海外開教史資料集成」(ハワイ編) 解題」『仏教海外開教

史資料集成・六』不二出版、二〇〇八年

藤井健志「ハワイ日系宗教史年表」『ハワイ日系宗教の展開と現況―ハワ

イ日系人宗教調査中間報告―』東京大学宗教学研究室、一九七九年

藤井健志「大日本仏教済世軍の展開と真宗教団」『東京大学宗教学年報』

Ⅲ、一九八六年

藤井健志「信者の意識から見た仏教運動の創始者―大日本仏教済世軍と真

田増丸―』『教祖とその周辺』雄山閣出版、一九八七年

藤井健志「大日本仏教済世軍の性格」『論集日本仏教史・九』雄山閣出版

一九八八年

藤井健志「仏教の海外布教に関する研究」『現代日本と仏教・Ⅱ』平凡社、

二〇〇〇年

宮林昭彦「ハワイ開教の歴史と現状」『ハワイ浄土宗教団宗教学事情調査報

告書』ハワイ浄土宗教団宗教学事情調査団、一九八二年

守屋友江「戦前のハワイにおける日系仏教教団の諸相」『立命館言語文化

研究』二〇巻一、二〇〇八年

與世盛智海「ハワイ教団における伝道の展開」『平成一六年度大学院真宗

伝道学特殊研究講義録』矢田了章研究室、二〇〇六年

驚見定信「海外に展開するハワイ仏教の現状」『仏教再生への道すじ』
勉誠出版、二〇〇四年

(二松学舎大学)